

# 真宗學

第 132 號

---

臨床宗教師研修の目的と特色

— 東北大学大学院の協力による実践真宗学研究科  
「臨床宗教師研修」構想 ……………鍋 島 直 樹

三毒五悪段「第一悪」の一考察……………佐々木 大 悟

親鸞の表現に関する一考察

— 漢文訓読語及び和文語の使用から — ……能 美 潤 史

伝道者としての真仏弟子

— 真仏弟子釈引文の解釈について — ……奥 田 桂 寛

親鸞聖人の漢字音に見られる諸相……………佐々木 勇

アルフレッド・ブルーム博士の浄土真宗への貢献

— 社会性の視座から — ……………藤原ワンドラ 睦

---

平成 27 年 3 月

龍谷大學 真宗學會

## 目次

臨床宗教師研修の目的と特色	
——東北大学大学院の協力による実践真宗学研究科「臨床宗教師研修」構想	
鍋島直樹	(一)
三毒五悪段「第一悪」の一考察	
佐々木大悟	(三七)
親鸞の表現に関する一考察	
——漢文訓読語及び和文語の使用から	
能美潤史	(五)
伝道者としての真仏弟子	
——真仏弟子釈引文の解釈について	
奥田桂寛	(七)
親鸞聖人の漢字音に見られる諸相	
佐々木勇	(二〇)
真宗学会第六十八回大会研究発表要旨	
平成二十六年真宗学講義題目	
平成二十五年真宗学専攻者修士論文・卒業論文題目一覧	
編集後記	
アルフレッド・ブルーム博士の浄土真宗への貢献	
——社会性の視座から	
藤原ワンドラ 睦	(一)

## 真宗学会第六十八回大会研究発表要旨

### 曇鸞における二種法身説の意義

龍谷大学大学院 長 宗 博 之

#### 一、はじめに

曇鸞における二種法身説は、その主著である『無量寿経優婆提舍願生偈註』(以下、『論註』)「淨入願心章」において、「諸仏菩薩有二種法身」(『淨真全』一・五一六頁)と述べられた箇所において確認できる。この「諸仏菩薩」という箇所は、深励師をはじめ、多くの先行研究において、その主体を「阿弥陀仏」として捉えられてきた。しかし、近年、石川琢道氏の指摘のように、阿弥陀仏一仏に限定することに対する否定的な見解も示されている。この点について、曇鸞が非常に大きな影響を受けた僧肇の般若思想より、その主体に関わる問題を検討したい。

#### 二、僧肇の思想構造

曇鸞在世当時の「般若」の理解については、僧肇のものを宗とすべしという記録が残っており、『論註』においても多分に

用いられる僧肇の思想を見ていかなければならない。

僧肇における「般若」の意義は、大きく分けて「無知」と「照察」という二種の義がある。特に、後者の「照察」の義は、「第一真諦」という言説を超えた真理を捉えるものとされる。この「第一真諦」は、その性質を「非有非無」なるものとされ、これを「般若」の義を以て照らす時、物は縁によつて成立するため、実有ではないという「非有」と、物は縁起によつて已に起つているため、全くの無であると見なせないという「非無」に分類して表現される。これによつて、その性質の言説化がなされる。そして、その二種は、「二言未始一。二理未始殊。」(『大正藏』四五・一五二頁b)とあるように、不二不異のよきな関係とされる。

この「般若」(主)と「第一真諦」(客)の関係については、悟りの境界において語る場合、本来主客という関係性は成り立たないが、僧肇は言説で表現する場合は主客に分けなければならぬという。これらの関係性は、『般若無知論』の最後に「寂用の論理」を用いて説明される。それは、

是以般若之与真諦。言用即同而異。言寂即異而同。同故無心於彼此。異故不失於照功。是以弁同者同於異。弁異者異於同。斯則不可得而異。不可得而同也。何者。内有独鑒之明。外有万法之実。万法雖実。然非

照不得。内外相与以成其照功。此則聖所不能同用也。  
内雖照而無知。外雖実而無相。内外寂然。相与俱無。此  
則聖所不能異寂也。

〔大正藏〕四五・一五四頁b-c、傍線は筆者）と述べられる。ここでは、「般若」(主)と「第一真諦」(客)の性質が「無知」「無相」なるものでありながらも、それが「一切知」「相」となるため、その具体相たる展開を「用」、その本質的同一性を「寂」と示される。そして、その「寂」と「用」は相即なるものとし、その論理を基にした言説・具体相によって、衆生が「般若」を得る。これが、僧肇の般若思想である。

### 三、曇鸞の二種法身説

先にも見たように、僧肇の思想構造は「般若」という主体を前提としたものであると確認できる。曇鸞においても、二種法身を用いる箇所では、

何故示現広略相入、諸仏菩薩有二種法身。(乃至)是故  
広略相入、統以法名。菩薩若不知広略相入。則不能  
自利他也。  
〔浄真全〕一、五一五―五一六頁

とあるように、「諸仏菩薩」が広略(略)「入一法句」、  
「広」三蔵二十九種莊嚴)の關係を知ること自利利他円満する。他にも、「未証浄心の菩薩」が浄土に生まれて阿弥陀仏を「見」れば、「上地の菩薩」と同等とさとりを得る記載もある。以上の箇所からも、菩薩と対象の主客の關係が見て取れ

るだろう。

ここで、先の僧肇の主客の関連性を考慮すると、「諸仏菩薩」の「般若」という真理と関わる側面を「法性」の「法身」とし、衆生に対して回向する「方便」の「法身」という二種を見出し、いたと理解できるのではないだろうか。

また、曇鸞は「第一義諦」に「仏因縁法」や「国土十七種莊嚴」を当てはめている。これは、『論註』上巻「受用功德釈」で、八地已上の菩薩と国土莊嚴が関連する記載があることから窺えるように、浄土の菩薩が阿弥陀仏の国土を伴って、衆生を救済することが確認できる。「第一義諦」自体に国土莊嚴という限定を認めることから、先の僧肇の思想のように「般若」が「第一真諦」と関連して、方便的展開をすることと符合する。以上のことを考慮すると、二種法身の主体を阿弥陀仏一仏と限定することは難しくなるだろう。

### 四、おわりに

僧肇の思想を基にした、「般若」と関わる主客の關係性が曇鸞の思想上にも確認できた。この場合、「諸仏菩薩」に二種の法身を見出した理由は、「第一義諦」を捉える「般若」を有する「法身」の一側面の提示、及び阿弥陀仏の浄土の具体相(方便)に真实性をもたらすものと考えられるだろう。  
なお、紙面の都合上、出拠については省略する。

## 存覚における『十住毘婆沙論』 依用に関する一考察

桑原 昭信

はじめに

親鸞の『十住毘婆沙論』(以下、『十住論』)を主とする龍樹教説の依用は他の七高僧に比べると頻度は少なく、親鸞以降の教説的著述においても印象を同じくする。そこで、本願寺教団草創期を代表する一人である存覚を取り上げ、親鸞の『十住論』の解釈・依用との交渉を通してその相承を確認し、存覚の意図するところを考察したい。本研究は浄土真宗における『十住論』受用の意義を明確にすることを最終目標としている。

### 親鸞の『十住論』の教説解釈と依用

『十住論』における「易行品」開示の意義は、「序品」所説の造由に対応すると考える。無始以来、生死の苦海を往来し続ける凡夫の到彼岸が目的であり、その初地に入ることによって百千億劫の後に極果を得ることが必定し、無限の苦が有限の苦と変わるのである。しかし、それでもなお途方もない時間を要することより、易行にして速やかに不退の位に入ることができ、方便説示への請求に応え、信方便易行が示される。「此の身」

においてその位に入ることができるとあり、ここに「易行品」開示の意義を見出すことができる。

『往生論註』(以下、『論註』)は『十住論』所説の難易二道を受け、易行道を「信仏因縁」「乘仏願力」「仏力住持」による往生浄土・入正定聚の為の行業とし、これは後の浄土教家の教相判釈の基盤となる。また、法然は『十住論』を「傍明往生浄土教」と解する。

親鸞は特に「易行品」所説の「即時入必定」の一句に注目し、真実の行信を獲るところの利益である、現生正定聚を明示する為の証文の一つとする。また、「高僧和讃」の「流転輪廻のわれらをば」「生死の苦海ほとりなし」等の各句は、『十住論』「序品」所説の造由を受ける文言であり、このような者だからこそ「弥陀弘誓のふねのみぞ、のせてかならずわたしける」と讃じるところに、「易行品」開示の意義を踏まえた上での解釈であるとうかがい知る。この知恵に基づいた「正信偈」の「応報大悲弘誓恩」の一句であり、報徳の意の表出と推する。

『十住論』の教説に依って往生浄土を語らず、徹底して現生における必定・正定聚の明示に最大の特徴があり、浄土教諸家や法然とは異なる独自の『十住論』の教説解釈である。

### 存覚の『十住論』の教説解釈と依用

【第一期】…『浄土真要鈔』の現生不退説の証文の一つとして、「正信偈」の「憶念弥陀仏本願」より始まるの四句と「行文類」行信利益の釈を取意して依用する。また、『弁述名体鈔』では「楞伽經」の説示を示し、『十住論』「十二

「礼」の阿弥陀仏への帰依より、「浄土の一聖」であると龍樹について述べる。

【第二期】『歩船鈔』では三論宗の教義概説の後、『十住論』『十二礼』の教説を挙げ、念仏易行の道に帰し、一念往生の安心を専修し、「浄土の大祖」であると述べる。

また、『決智鈔』では、『論註』の文を、『十住論』の文として引用する。

【第三期】『六要鈔』では、『十住論』のなか、特に「易行品」は詳述する。また、他処の「不退」についての説示では「易行品」の教説を依用する。

存覚の著述は三期に分けることができる。<sup>1)</sup>『十住論』依用を概観すれば、親鸞の「易行品」を主とする解釈・依用を踏襲し、特に『歩船鈔』の『十住論』『序品』所説の造由を受ける説示より、兩人の共通した解釈のあることを確認することができる。また、浄土教諸家と同じく、龍樹は阿弥陀仏の浄土へ願生・往生したと解する一面もある。しかし、「易行品」所説の不退説に関しては、親鸞と趣が異なるようである。

『浄土真要鈔』では「即得往生住不退転」を現生正定聚の意と明示する為に、先ずは『往生礼讚』の「蒙光觸者心不退」に基づき、その「不退転」を心不退と定める。また、当時隆盛の浄土宗鎮西派の処不退説や通仏教の四不退説を遮るものでもないとし、ここに与奪の意を示している。続いて心不退の証文として、『憶念弥陀仏本願』の四句や行信利益取意の文等を依用し、

浄土異流を意識しながらも当流の教義を明示している。また、『六要鈔』では「易行品」所説の不退に此土・彼土を論じることや、正定聚について隠顕を配することも、その意図を同じくするところである。

おわりに

当流が示す現生正定聚を顕示する為に、親鸞・存覚は共に『十住論』の教説を依用する。しかし、本考察においてはその意義・必要性までは、明らかにすることができていない。そこで今後は、当時隆盛の浄土異流等における『十住論』の解釈のなか、特に不退説に関わる説示の比較を通して考察することとしたい。

註

- (1) 名畑崇『破邪顕鈔序説』（真宗大谷派宗務所出版部・四頁）、外川燮「存覚の思想展開」（『日本思想史研究』三〇・一頁）を参照。
- (2) 井上善幸「親鸞の『十住毘婆沙論』理解について」（『真宗学』一〇九・一一〇・五五三頁）、同氏「法然門下における『十住毘婆沙論』理解の諸相について」（『真宗研究』四九・三五頁）を参照。

## 真宗伝道学の基礎的考察

— 伝道としての伝道学 —

龍谷大学教授 貴島 信行

真宗伝道学は真宗学における従来の客観的研究分野としての教義学、文献学、あるいは歴史学(浄土教教理、教学)とはその性格を異にして、きわめて主体的な宗教体験にかかわる実践性が問われる分野であるといえる。しかしながらそうした性格を有する真宗伝道における基礎となる理論の構築、体系、組織化については今日まで十分な蓄積が有るとは言いがたい。

そこで本発表では、仏教が成仏道であり伝道が成仏道における求道からの必然的展開として位置づけられ、念仏行者における往生浄土の歩みの帰結ともなっていくことを示し、実践性という視点から、如来の立場と自己の立場の双方の考察、さらには如来・自己との関係性から展開される自己(伝道者)と他者(被伝道者)における双方の通路を視野とする親鸞聖人の往生成仏道の基本構造について考察する。

まず「伝道」の構造について、「伝(傳)」には「つたへる。つたはる。ひろめる。ひろがる。のべる。とりつく。通づる」という語義から「つたえる」「つたわる」の両義を有すること可知される。「教行証文類」「信文類」「聖典全書」二、一〇一頁)、「化身土文類」(「同」二〇九頁)所引の「往生礼讃」自信

教人信の文では、原文の「大悲傳普化」が『集諸経礼懺儀』によって「大悲弘(略)普化」(化身土文類)と文字の置換がなされ、そこに伝道(自信教人信)の主体が行者(つたえる)に先だち、如来大悲の力用(願力自然)の立場(つたわる)において可能となる意が看取される。

次に「道」については「心清浄道」「菩提bodhi(梵)の訳語、目的地(無漏涅槃寂滅無為)に到達すべき通路。能通を以て義と為す。道を証する為の因(因道)。普遍的な根源(道)、物事の筋道(理)。一切万有をつらぬく法則。道心(「菩提心bodhi-cita)、自利利他の心。言葉、述べる。人のふみ行うべき道。不死(amata)、安穩(khema)、涅槃(nibbana)」「行道、得道、学道、涅槃に至るための実践修行(八正道)」、さらに自らの行為(業)により趣く生存状態、場所・世界(三悪趣、六趣)をも含んで、成仏にかかわる目的、方向、行為性、存在在り方など、広大な概念を表している。

さて、親鸞聖人の仏道が「生死いづべき道」(「恵信尼消息」)であったことは周知の如くである。生死煩惱に苦悩する自己から解脱を願い、二十年にわたる叡山での修道(自力・聖浄未分の仏道)を経て吉水において他力浄土の法門、選択本願に値遇し、ついに「本願一乗」「一実真如之道」に帰することとなる。「道」の本質は「法性、真如、大涅槃道、無上解脱道、最勝道、勝過三界道」などと示される果道であって、大行、大信という因道もまた法性真如の顕現として、「往生極楽のみち、他力白道、易行道、無碍道、凡夫道」などと表現され、自力聖道の「小

路」に対して大乘至極・他力大道である意が示されている。また果道・因道の相即性がそこに窺える。

もと仏道の構造とは、「道↓道用(はたらき)↓道義(教説)」（法から人への立場）、「道義↓道用↓道」（人から法への立場）があり、ことに浄土教では「道(真実)・道用(本願)・道義(浄土の法門)」と展開していくとされる。因道から果道(迷から悟、衆生から仏、輪廻から涅槃、穢土から浄土)をあらわすのは向上門(「教行証文類」では往相回向)、果道から因道(悟から迷、仏から衆生、涅槃から無明生死、浄土から穢土)をあらわすのは向下門(還相回向(衆生摂化、教化利益))とされ、両門が不二体の関係にあると言われている。この果道・因道の関係性は自覚・覚他・覚行窮満である仏が迷妄流転の境界に向けて真実化、普遍化していく構造を如実に示している。

大乘の菩薩は自己の悟りの完成と他者(一切衆生)を利益し救済の実現に向かうという偉大な心を持ち、無量の仏徳を体現して菩薩の行を實踐し、菩薩のいのちを生きる修道者である。この自利利他一体の菩薩の心こそが願作仏心・度衆生心を備えた真宗信心の内実そのものであったといえる。「教行証文類」には獲信(自信)において現生十益が説かれる中、知恩報徳、常行大悲(教人信)という教化利益の展開が明らかにされている。自己(伝道者)から他者(被伝道者)への通路は衆生回向であり、さらに大悲による他者から自己へ通路をも開くという双方向性がそこに窺える。この通路を「向他門」と名づける。

厳しい求道・聴聞を経て、獲信から証果へ向かう因道は「大悲弘普化」といわれる大悲力用の回向(向上門・向下門)であり、「大悲伝普化」の道理によつて獲信からの必然として他者に向かう通路は衆生回向(向他門)である。「信文類」信業釈下「涅槃経」信不具足の文には、道を信じ、かつ得道の人を信ずるところに信の完全性があることが示されている。また伝道の実際においては、「御一代記聞書」に「仏の加備力の故に尼入道などのよろこばるゝをきゝては、人も信をとるなり」(「聖典全書」五、五五四頁)という教示も向他門の構造を知る証左となろう。道は「一実真如之道」という(ただ一つの道)(向下)であり、「親鸞一人がためなりけり」(「歎異抄」後序)といわれる極重悪人の凡夫が極善最上の法に値遇する(われの道)(向上)であり、「十方衆生みなもれず往生すべし」(「尊号真像銘文」)「同一念仏無別道故」(証文類)と示される(われわれの道)(向他)である。

求道は究極の目的である成仏道へのプロセスであり、獲信以後も本願の真実を自他の上に証していくという歩みとなる。つまり行道の實踐において自己のさとりを求める求道(聴聞)は獲信を契機としながら、衆生を利益せんとする伝道において仏道の完成をめざすところに大乘菩薩道としての意義をもつ。

かくして伝道は求道の必然的展開であり、念仏行者における往生浄土の歩みの帰結ともなっていくと考察しうる。それは親鸞聖人の仏道がひとえに如来・自己・他者という関係性において、如来を主体とする向上、向下、向他という三双方向性にお



ける円環的な構造、はたらき(道用)を有しているからにほかならなかつた。

釈尊が説き明かした真理が「永遠不死の道」といわれ、道の目的を達成しえてもなお終わることなき歩みとして示されるところ、真宗の仏道もまた迷妄の世界に本願の真実の教法がたえず普遍化して止むことがないという、広大無辺の悟りの領域と大悲摂化の力用をあらわす概念であったことが知られる。

# 平成二十六年年度真宗学講義題目

## 文学研究科真宗学専攻

### 。浄土教理史演習

『教行証文類』の研究（統講）

川添 泰信

### 。真宗教学史演習

『顕浄土真実教行証文類』

龍溪 章雄

### 。真宗伝道学演習

真宗伝道の総合的研究

深川 宣暢

### 。真宗学演習

親鸞思想における真実の救済観の解明

鍋島 直樹

### 。真宗学演習

『教行証文類』の基礎的研究

那須 英勝

### 。真宗学特殊研究

A 宗教と生命倫理

那須 英勝

— いのちに関する諸問題—  
B 親鸞思想の普遍性と多元性

那須 英勝

— 「宗論」から「宗教問対話」への道程—

A 「証文類」の諸問題

那須 英勝

B 「真仏土文類」の諸問題（1）

内藤 知康

A 「現代世界の中の親鸞浄土教」

内藤 知康

ヒロタ デニス

B 「現代世界の中の親鸞浄土教」

ヒロタ デニス

### 。真宗教学史特殊研究

A 蓮如教学の研究

林 智康

B 蓮如教学の研究

林 智康

### 。浄土教理史特殊研究

A 親鸞浄土教における教法授受の問題

川添 泰信

B 親鸞浄土教における教法授受の問題

川添 泰信

A 『法然聖人御説法事』の研究

藤堂 俊英

B 『選択本願念佛集』の解説

藤堂 俊英

### 。真宗学文献研究

A 醍醐本『法然上人伝記』を読む

高田 文英

B 醍醐本『法然上人伝記』を読む

高田 文英

A 『一念多念文意』

井上 善幸

B 『一念多念文意』

井上 善幸

A 親鸞の『浄土三経往生文類』を読む

藤 能成

B 『浄土文類聚鈔』を読む

藤 能成

A 『唯信鈔文意』を読む

藤 能成

— 『唯信鈔』とともに—

殿内 恒

B 『唯信鈔文意』を読む

殿内 恒

— 『唯信鈔』とともに—

殿内 恒

A 『西方指南抄』を講読する

武田 晋

B 『西方指南抄』を講読する

武田 晋

A 英語で読む浄土真宗聖典

那須 英勝

B 英語で読む浄土真宗聖典

那須 英勝

○伝道学特殊研究

Aメタファー論の射程

杉岡 孝紀

B親鸞における生死観と超越

―ビハラ活動と臨床宗教師の意義― 鍋島 直樹

○真宗伝道学特殊研究

真宗伝道学の基礎的研究とハワイにおける伝道の実践的研究

研究

深川 宣暢

実践真宗学研究科

《基礎研究科目》

○実践真宗学総合演習Ⅰ

(ア)実践真宗学の分野と方法

龍溪章雄・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島理

(イ)実践真宗学の分野と方法

田畑正久・葛野洋明・貴島信行・龍溪章雄・早島理

○実践真宗学総合演習Ⅱ

(ア)実践真宗学の分野と方法

龍溪章雄・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島理

(イ)実践真宗学の分野と方法

田畑正久・葛野洋明・貴島信行・龍溪章雄・早島理

○実践真宗学研究

実践真宗学の基本的理解

杉岡 孝紀

○真宗教義学研究

真宗教義

内藤 知康

○現代宗教論研究

「宗教と倫理」―宗教多元のなかに生きる―

高田 信良

○大乘仏教論研究

仏と浄土 桂 紹隆

○浄土教思想論研究

浄土教思想の基礎的研究 武田 晋

○現代社会論研究

現代社会と宗教 亀山 佳明

○宗教心理学研究

宗教経験の諸相 ―ジェイムズ、ヘーゲル、親鸞に学ぶ― 高田 信良

○宗教教育学研究

宗教と人間形成 海谷 則之

○仏教伝道史研究

近現代アジア仏教史と伝道の課題 藤本 信隆

○真宗伝道史研究

浄土真宗と伝道 川添 泰信

○真宗教団論研究

真宗教団の存在意義 龍溪 章雄

○倫理学研究

正義とケアの倫理 丸山 徳次

《専門研究科目（宗教実践活動分野）》

○真宗人間論研究

《専門研究科目（宗教実践活動分野）》

○真宗人間論研究

親鸞の人間像と人間観

杉岡 孝紀

B 浄土真宗における理論と実践

布教伝道論研究

貴島 信行

— 教えと現実を繋ぐ —

真宗伝道における基本的理解と実践

貴島 信行

C 浄土真宗寺院の実践運動を学ぶ

組織活動論研究

三上 章道

D 親鸞聖人の御消息(書簡)

寺院活動の基本

三上 章道

E 本願寺教団の近代化と教団改革論

情報メディア論研究

宮本 義宣

F 近代社会での仏教の教育と教化を考える

宗教と情報メディア

宮本 義宣

G 表現スキルの獲得

文書活動論研究

西 義人

宗教実践演習 I

文書作成と添削

西 義人

親鸞教義に基づく社会実践の可能性

都市開教論研究

小野 真

真宗伝道の基礎的研究と実践

寺院活動

西原 祐治

国内外の布教伝道の実践的側面に関する課題とその研究

宗教儀礼論研究

小野 真

宗教実践演習 II

宗教儀礼の諸相と意義

小野 真

真宗伝道につながる親鸞の死生観と人間観の研究

寺院活動論研究

善井 信明

法座伝道における実践方法

現代における寺院・住職活動の実践的な重要点や問題点の考察

善井 信明

国内外の布教伝道の実践的側面を通した、各自の宗教実践的課題の研究

宗教法人運営論研究

山口 卓

宗教実践演習 III

I 現代社会における宗教法人運営の実践的研究

山口 卓

真宗伝道の実践的考察と修士論文等の作成

II 寺院の適正なる管理運営について

林 春男

浄土真宗における宗教実践の課題と方途

宗教実践特殊研究

林 春男

国内外の宗教実践の課題を通した研究の結実

A 国際伝道から窺う現代における伝道の研究

葛野 洋明

宗教実践実習

— 理論と方法 —

葛野 洋明

宗教実践実習

— 理論と方法 —

葛野 洋明

宗教実践実習

葛野 洋明

- ・ 真宗伝道の実践と課題
- ・ 真宗における布教伝道と寺院活動
- ・ 宗教的実践課題に則した実習

深川 宣暢  
 貴島 信行  
 葛野 洋明

《専門研究科目（社会実践活動分野）》

- 真宗人間論研究
- 親鸞の人間像と人間観
- 生命倫理論研究
- 生命倫理・倫理・宗教
- 人権・平和論研究
- 仏教における人権論と平和論の可能性
- ビハーラ活動論研究
- ビハーラ活動・臨床宗教師の理念と実際
- カウンセリング論研究
- 宗教とカウンセリング援助技術
- 地域活動論研究
- 当該地域の特徴を地域活動に活かす
- 生涯学習論研究
- 寺院活動と生涯学習実践
- 臨床心理学研究
- 臨床心理学の理解と実践上の基本問題
- 発達心理学研究
- 人間と成長・発達の諸問題
- 人格心理学研究

人格変容の問題と宗教  
 ○ 矯正論研究  
 刑事施設における犯罪者の社会復帰と宗教に何が期待されているか？そして、宗教に何ができるか？  
 石塚 伸一

杉岡 孝紀

社会福祉論研究  
 社会福祉の現状理解と社会福祉論の検討  
 清水 教恵

早島 理

○ ボランティア・NPO活動論研究  
 ボランティアとNPOと宗教  
 深尾 昌峰

井上 善幸

○ こども社会学研究  
 真宗寺院における子どもの活動実践のために  
 持田 良和

鍋島 直樹

○ グリーフケア論研究  
 宗教的实践者としてのグリーフケア  
 黒川雅代子

友久 久雄

Clinical Training for Spiritual Care and Religious Care  
 社会実践特殊研究  
 鍋島 直樹

窪田 和美

○ 社会実践特殊研究  
 A 生老病死と先端医療（終末期医療、移植医療）  
 早島 理

持田 良和

B 仏教カウンセリングとスピリチュアルケア  
 C 日本浄土教とキリスト教の出会いと交流  
 吾勝 常行

森田 喜治

○ 遠藤周作の小説を参考にして  
 ヒロタ デニス

滋野井一博

D 宗教と生命倫理  
 ーいのちに関する諸問題ー  
 那須 英勝

田中 教照

E 社会の諸問題と仏教の現代的意義  
 田中 教照

F 現代社会にあふれる「苦」に対応する寺院・僧侶の  
実践活動  
高橋 卓志

G 真宗・仏教の福祉実践の目的と意義  
長崎 陽子

○社会実践演習 I  
・ 生命倫理・倫理・宗教  
早島 理

・ 社会実践について  
田畑 正久

社会実践演習 II  
・ 生老病死と終末期医療  
早島 理

・ 社会実践について  
田畑 正久

社会実践演習 III  
・ 修士論文及び報告書の作成  
早島 理

・ 修士論文及び報告書の作成  
田畑 正久

社会実践演習  
・ 学外実習の基礎  
早島 理

・ 実習に向けての検討・討議  
田畑 正久

○諸過程科目 真宗教団活動論  
布教使資格取得に関する諸講義  
季平 博昭

親鸞思想（真宗教義）解釈史の概説  
龍溪 章雄

○浄土教聖典学概論  
浄土教聖典の成立と展開  
河智 義邦

○真宗聖典学概論  
親鸞と覚如・存覚・蓮如の説き示した教え  
貫名 讓

○浄土教概論  
法然門下の浄土教を中心として  
武田 晋

○真宗伝道学  
浄土真宗は、現代人の苦悩と問いにどう応えるのか？  
藤 能成

○比較思想論  
親鸞思想への比較思想論的アプローチ  
那須 英勝

○教理史特殊講義  
A 中国浄土教の諸問題―「教理史」の視点―  
中平 了悟

B 教理史的立場での『往生論註』の講読  
溪 英俊

○教理学特殊講義  
A 近代の真宗思想入門  
岩田 真美

B 近代における浄土真宗のアジア布教  
― 教理学史、教団史よりの考察―  
野世 英水

○教義学特殊講義  
A 親鸞の人間理解と救済観  
鍋島 直樹

― 生きる意味の探求  
B 念仏と信心の基礎講座  
佐々木寛爾

C 親鸞浄土教の普遍性と特殊性  
武田 一真

文学部真宗学科

○真宗学概論 A

真宗教義の基本的理解

○浄土教理史

浄土教の成立と展開

○真宗教学史

川添 泰信

深川 宣暢

○伝道学特殊講義

A 生老病死の四苦の解決を同じ課題とする医療と仏教の協働に向けて

田畑 正久

B 浄土真宗の教えを生きる  
— 教えと現実を繋ぐ —

藤 能成

○教理史講読

A 『無量寿経』巻下を読む

B 『安楽集』講読

C 『十住毘婆沙論』『易行品』を読む

○教学史講読

A 「御文章」講読

B 「浄土真要鈔」を読む

○教義学講読

A 『教行信証』上、「教巻・行巻・信巻」

B 『教行信証』の後半、特に証巻を中心に講読する

C 「唯信鈔文意」を読む

D 「尊号真像銘文」の視覚的読解

E 親鸞の書簡を読み解く

○伝道学講読

A 存覚「浄土真要鈔」を読む

B 「三帖和讃」を読む（継統）

C 親鸞の伝記「御伝鈔」を読む

○真宗学基礎演習ⅠA（真宗入門）

井上見淳・岩田真美・佐々木大悟・高田文英・能美潤史

○真宗学基礎演習ⅠB（真宗入門）

井上見淳・岩田真美・佐々木大悟・高田文英・能美潤史

○真宗学基礎演習ⅡA（「正信念仏偈」を学ぶ）

佐々木大悟・能美潤史・藤能成・高田文英・井上見淳

○真宗学基礎演習ⅡB（「正信念仏偈」を学ぶ）

佐々木大悟・能美潤史・藤能成・高田文英・井上見淳

○教理史演習Ⅰ

・浄土教思想の普遍性と特殊性

— 『仏説観無量寿経』解釈の歴史に学ぶ —

那須 英勝

武田 晋

○教学史演習Ⅰ

・法然聖人の浄土教を学ぶ

・親鸞教義解釈史の研究

— 『歎異抄』の教学史的研究を中心に — 深川 宣暢

○教義学演習Ⅰ

・親鸞教義の基礎的研究

・阿弥陀仏を考える

○伝道学演習Ⅰ

○伝道学の諸問題

— 真宗伝道の理念と歴史と方法をめぐる課題探究 —

親鸞と蓮如の書物を通して生き方を学ぶ

○卒業論文（教理史演習Ⅱ）

卒業論文（教理史演習Ⅱ）

北岑 大至

金信 昌樹

三浦 真証

龍溪 章雄

玉木 興慈

川添 泰信

普賢 保之

長岡 岳澄

安藤 章仁

安藤 章仁

安藤 章仁

安藤 章仁

安藤 章仁

安藤 章仁

安藤 章仁

- ・卒業論文研究（浄土教理史の基礎的研究II）高田 文英
- ・各自が問題意識を持ち、それを明らかにするための調査と思索の成果を「卒業論文」にまとめる。井上 見淳
- 卒業論文（教学史演習II）
  - ・卒業論文研究（真宗教義解釈史の研究II）深川 宣暢
  - ・教学史の諸問題 井上 善幸
- 卒業論文（教義学演習II）
  - ・親鸞思想と現代世界 鍋島 直樹
  - 真実の探求 殿内 恒
  - ・真宗思想に関連する諸問題 龍溪 章雄
- 卒業論文（伝道学演習II）
  - ・真宗学の諸問題 藤 能成
  - ・現代社会における浄土真宗のあり方 玉木 興慈
- 真宗学概論B1 玉木 興慈
- 真宗を学問として学ぶ
- 真宗学概論B2 玉木 興慈
- 真宗を学問として学ぶ
- 布教伝道論I 貴島 信行
- 浄土真宗における布教伝道の理論と実際
- 布教伝道論II 貴島 信行
- 浄土真宗における布教伝道の基礎と実践的側面からの考察
- 真宗教団史 三浦 真証
- 葛野 洋明



# 平成二十五年度 真宗学修士論文・卒業論文題目一覧

論文題目	姓名	真宗における他作自受の問題について —親鸞の因縁観より—	伊藤 雅玄
大学院修士論文			
親鸞における信仰的実存の意義	鹿島 涼	「便同弥勒」「諸仏等同」思想の研究	日下 貴行
親鸞における「三心」についての研究	中村 恵明	真宗における社会活動の根拠について	谷治 暁
—法然・隆寛を背景として—		—慈悲の考察と近代の社会実践論をめぐって—	
「往生浄土」について	塚原 義明		
浄土教における往生別時意の研究	安藤 愛	<b>実践真宗学修士論文</b>	
能化時代初期における十劫久遠論の研究	岩田 恒	御示談の一考察	石丸 恒平
—月峯師を中心に—		—Buddhist Education Centerの取り組みを通して—	
島地黙雷と明治真宗教学史	内手 弘太	現代における真宗伝道	伊東 真輝
親鸞と門弟		仏教と脳死・臓器移植	押野 淳佑
—高田教団の原点をさぐる—	武田 真応	曾我重深における真宗の体験的理解	加藤 智海
初期佛光寺教学の研究	梨本 雄哉	寺院活動の可能性	衣笠 顯也
—阿佐布門徒・了海の『他力信心聞書』と『還相回向聞書』とを中心に—		—法座の事例を通して—	
真宗カウンスリングの研究	西澤 傑	幼少期における宗教教育の必要性	黒川 誓慈
—西光義敬の法中心カウンスリングに学ぶ—		—過程環境と日曜学校を視点として—	
野々村直太郎『浄土教批判』をめぐる一考察	舟谷 真弥	—親鸞の人間観にみる宗教教育—	小原 一静
親鸞における救済思想	毛利 真之	寺院における宗教教育の研究	佐々木龍祐
—聞名を中心に—		—日曜学校の課題と可能性—	

正宗の伝道における行動原理  
正宗を学ぶ意義

佐藤 慶樹  
嶋倉 崇信

―現代における寺院伝道の方途―  
浄土正宗における価値転換  
―トランスパーソナル心理学を通して―

宮崎 史人

―気づきと成長について―

攝受 弘宣

親鸞聖人の伝道と現代への対応

驚阪 恵子

ヨーロッパにおける浄土正宗伝道の可能性

田中 至道

浄土正宗の活動としての「グチコレ」の意義  
―教学上における愚痴の位置づけを通して―

大塚 雄介

高齢社会における老病死の受容

―病気・障がいを経験した念仏者を通して―

「地域における寺院活性化の可能性」

阪口 一吾

―寺院活動と宗教的魅力の考察―

寺西 龍珠

寺院活動における地球環境問題の意義  
緩和ケアの現場における僧侶の活動

田丸 裕昭

親鸞の生死出づべき道の研究

―現代社会におけるデス・エデュケーションの必要性と展開―

現代社会における布教伝道の考察

二宮 朋生

現代社会におけるデス・エデュケーションの必要性

長尾 正徳

現代社会における宗教者の課題  
―ケアの現場を通して―

林 郁貴

現代布教伝道の研究

―「法話資料ファイル」の創作と展開―

文学部**正宗学**科卒業論文  
現代人の宗教観と親鸞の思想

藤井 一葉

―メール相談を通じて―

長嶋 蓮慧

親鸞における苦悩の一考察

川口 弘次

宗教者による社会福祉活動の可能性

西池 深音

親鸞における苦悩の一考察

田代 浄明

環境問題と仏教の関わり

根来 亮慧

正宗寺院の現状と課題

大塚 真慈

正宗ビハラー活動の理念を根本とした介護従事者について

野村 廣大

蓮如教学について

大原 洗融

苦悩と向き合う浄土正宗

福間 正顕

現代人における正宗の教えの誤解と理解

金安 真弥

ビハラー活動における慈悲の展開について

藤繁 唯信

正宗における女人往生についての考察

斉藤万里絵

高齢者福祉の現場における宗教者の関わりについて

三上 暢

真慧の念仏観  
大町如道の研究

塩崎 脩平

―一考察―

水口 照道

―越前正宗史の一断面―

平 仁

北陸の念仏道場の成立とその背景

妙好人の歩んだ道

辻 尚人

— 妙好人へ的人格形成 —

親鸞と法然の思想の違い

— 悪人正機 —

真宗の神祇観

近代以降における「悪人正機」解釈について

悪人正機について

仏教生命観からみる脳死・臓器移植

— 親鸞思想をたよりにして —

浄土真宗における社会実践

現代社会における浄土仏教とは何か

自殺は悪か？

— 親鸞から見る自死・自殺問題 —

化身土巻についての一考察

いのちの選択と宗教

— 浄土真宗の立場から —

真宗における往生観の一考察

親鸞の人間観

— 悪人正機説を中心に —

倫理基盤としての浄土真宗

現代における葬儀と真宗伝道

日本社会における浄土教の発展

浄土真宗の観点から見る自死問題

蓮如とルタ

— 思想と教団の展開 —

長濱 智基

真宗における現世利益の一考察

西田 頭証

— 宗教改革者のメンタリテイとは —

朝枝 遊心

大経讀から見える親鸞の観経観と思想

岡部 頭慈

三國連太郎と親鸞聖人

沖 麻実

現代人の宗教観と浄土真宗の思想

黒岡 寛大

親鸞聖人の伝道姿勢とその現代的意義

齋藤 光

真俗二諦論の研究

経谷 玲

縁起思想の現代的意義

長尾 勲

延命治療と尊厳死の問題

長屋 里美

— 親鸞の死生観より —

橋本 秀円

浅原才市に見る浄土真宗の実践生活

有熊 宏徳

— 親鸞の本尊論

— 浄土真宗からみる靖国問題

— 現代社会と浄土真宗

— デス・エデュケーションを手がかりとして —

— 真宗から見るコミュニケーションの考察

— 浄土真宗における伝道

— 現代における自死問題と親鸞思想

安静 至邦

安藤 千珠

伊澤 凌

石飛みのり

石和田健太

泉 真慈

板垣 聞由

市川紗矢香

巖后美乃里

岩田 光

梅田 遼

榎生 拓也

遠藤 孝典

大賀 梓

正親 一宣

大島 友基

大西 俊郎

岡本 隆男

小川 義徳

現代人の宗教観と親鸞思想

— 異文化理解を目指して —

真宗における坊守の役割

―惠信尼から学ぶ―

アジャセ王の救い

龍谷大学における宗教教育の展開

現代人の宗教観

―歎異抄を中心として―

これからの真宗伝道のあり方

現代に生きる蓮如の思想

真宗教済論の現代的意義

真宗における人間の問題

―悪人正機をめぐって―

現代における真宗伝道の可能性と意義

現代人の死生観と往生思想

浄土真宗の神秘性に関わる概念についての考察

真宗の信についての一考察

親鸞聖人と真仏上人

仏教における地獄のメッセージ

親鸞思想の人間観

「歎異抄」における浄土真宗理解

―悪人正機について―

少子高齢化社会における浄土真宗

―現代の寺院と僧侶の在り方―

法然の念仏観

浄土真宗の伝道における医療的ケア

幸せになるための選択肢としての宗教

和讃から観る親鸞教義

―親鸞教義が現代に投げかける問い―

日本人の宗教意識と真宗

日本人の宗教観

―死生観を中心として―

妙好人の研究

―お軽同行を中心として―

「行巻」における大行の研究

親鸞の阿弥陀仏観

親鸞の末法観

浄土真宗の寺院活動のこれから

―現代日本人の宗教意識の関わりにおいて―

親鸞の罪悪観について

親鸞における信心の利益

蓮如の伝道

苗木藩による廃仏毀釈

沖繩の宗教史

―浄土真宗の受容と展開―

浄土真宗と和歌

現代におけるグリーンケアの意義

―真宗との関わりを考えて―

現代社会と宗教・仏教

社会と宗教

親鸞思想とルター思想についての一考察

佐々木教将

塩田 信成

芝山みどり

島田 昂

杉本 優樹

鷲見 燈璃

多恵真由子

高田 弘樹

高田 信

高千穂 透

高橋 勇希

瀧 唯香

竹原龍太郎

立川 祐子

田中 麻未

田中 亮輔

田中 良亮

月 秀美

現代と浄土真宗

— 現代における人間の問題 —

真宗における死生観の一考察

三國連太郎と親鸞

幕末維新期における西本願寺教団の動向

世界から見た日本人の宗教観

浄土真宗における救済

— 親鸞と一遍との比較考察 —

真宗とターミナルケア

親鸞聖人の結婚観

日本における葬儀の研究

中世本願寺教団における神祇観

— 親鸞から蓮如 —

親鸞とルタ

仏教の女性観

— 宗教の女性差別をめぐる —

浄土真宗の伝道

— 親鸞・蓮如の伝道と現代の伝道 —

多元化世界とビハラの実践

親鸞聖人と御消息

真宗と習俗

親鸞の人間理解

— 親鸞の外顔と内面を見つめて —

真宗における葬儀の意義

寺西 良衣

蓮如上人の教学と伝道

平戸 宏祐

富谷美香子

真宗における女人観

平通 孝樹

中尾 慎也

現代における浄土真宗の意義

深川 樹哉

中谷 菜由

— 日本人の宗教意識をふまえて —

福田 蓮

中西 光史

日本人の死生観からみる白骨の御文章

福永沙希子

永石 俊一

現代人と親鸞聖人の教え

藤雄 正受

— 善導を中心に —

永田 智幸

真宗における観仏と念仏

藤園 泰基

永吉 航大

現代における真宗伝道の考察

藤原 慶哉

苗村 教行

— 伝道の歴史と課題 —

古川 詠一

西村ひふみ

妙好人の信心

堀島慎太郎

— 庄松、お軽、源左、才市 —

信川 麻実

悪人正機についての一考察

本川 無為

橋本 覚正

親鸞と蓮如に学ぶ現代の伝道姿勢

前山 智弘

— 特に仏身に関して —

長谷川義徳

現代人の苦悩と幸福にこたえる宗教

榎藤 哲嗣

— 親鸞の思想に学ぶ —

服部 修平

浄土真宗と同和問題

松永 楓趣

花香 知寿

親鸞と法然

松浪 賢誓

秀嶋 龍真

浄土真宗における宗教と政治の関係

松並 紘樹

毘奈 宗典

— 時代に求められる真宗を目指して —

— 善導の凡夫観

日野 彰道

— 「善根薄少」の言についての考察 —

親鸞の想う念仏

—法然の念仏との相違—

現代日本社会における伝道

—浄土真宗を中心として—

戦時教学をめぐる一考察

苦悩と真宗の救い

善鸞義絶事件についての一考察

戦国期本願寺の考察

現代社会における宗教の必要性

真俗二諦の研究

親鸞の思想哲学

—三願転入の考察を通して—

法然と明恵

—『摧邪輪』における法然批判を巡って—

蓮如上人の伝道について

蓮如上人の女性観

曇鸞と道教

善鸞の義絶をめぐる一考察

悪人正機説から見える法然と親鸞の思想

真宗（仏教）における伝道の意義

—ブータンの仏教をめぐる一考察—

『唯信鈔』について

「獲得名号自然法爾」に関する一考察

ビハラー活動について

松野希有華

親鸞の念仏思想

松本 知恵

浄土真宗における生死観  
仏教と福祉

間淵 聡

—障がい者福祉とグリーンフケアを中心として—  
真宗儀礼についての一考察

丸山祐美子

—善導大師と歴代宗主の儀礼を通して—  
ビハラー活動

宮井 慧

現代社会と浄土真宗  
—ビハラーを中心として—

村上 翼

—人間にとって宗教とは—  
浄土真宗の女性観について

村上 佑孝

現代と浄土真宗

村松 直紀

毛利 大慶

柳堂 應基

藪 彰頭

山田 克彦

吉井 直道

脇 広海

涌田 雅之

鷲岡 遊

田中 好三

宇野 悦耳

甲斐 裕史

結束みさき

駒田 将太

鈴木 幹子

高橋 了

寺本 志織

丸限 燈子

森川 瑞希

津田 利博

伊吹 亮

田中 好三

津田 利博

伊吹 亮

田中 好三

津田 利博

伊吹 亮

田中 好三

津田 利博

伊吹 亮

田中 好三

津田 利博

伊吹 亮

田中 好三

(永田文昌堂のみ有効)

編 集 後 記

『真宗学』第一三二号をお届けいたしました。今号には、文学部教授の鍋島直樹先生、同講師で今年度より新たに着任された佐々木大悟先生と能美潤史先生の論文に加え、大学院文学研究科博士課程三回生の藤原ワンドラ陸さん、同二回生の奥田桂寛さんの二名の投稿論文、さらに真宗学会第六七回大会(平成二五年一月五日開催)で行われた広島大学大学院教育学研究科教授の佐々木勇先生の記念講演録を掲載することができました。

鍋島先生は、本年度より実践真宗学研究科に開設された臨床宗教師研修において中心的な役割を担っておられる先生です。本論文では、研修開設までの経緯やその目的を論じられ、臨床宗教師研修が人々の苦悩や社会的な諸課題に向き合う人材を育成するものであることを明示されています。佐々木先生は、『無量寿経』五悪段の第一悪に関する従来の解釈を問題とされ、ご自身ととくに専門とされる『大阿弥陀経』との関わりなどをもとに、新たな読み方を提示されています。能美先生は、国語学における研究の蓄積を十分に踏まえながら、親鸞聖人の聖教における漢文訓読語と和文語の使い分けを総合的に精査し、親鸞聖人の表現法には受け手への細やかな配慮が見ら

れることを明らかにされています。藤原さんは、アルフレッド・ブルーム氏が西洋英語圏で果たした浄土真宗への貢献を、ブルーム氏の業績を網羅的にまとめながら、浄土真宗の社会性という視点から論じています。奥田さんは、伝道学の視点からはこれまであまり注目されなかつた『教行信証』真仏弟子釈を取り上げ、そこに真宗の伝道者像の教学的な根拠の一端が求められることを論じています。佐々木先生の記念講演録は、親鸞聖人の用いられた漢字音についてお話しいただいたものです。親鸞聖人は中国伝来の呉音をどのように発音・区別されていたのかなど、中世の日本漢字音研究というご専門のお立場から貴重なお話しを頂戴しました。

ここに六先生には、謹んで御礼申しあげます。また今号は、龍溪先生をはじめ編集委員の先生・院生の皆さん、運営協議会の皆さんのご協力により、順調に編集作業を進めることができました。関係の皆様には誌上を借りて感謝申しあげます。なお今年度より、真宗学会大会の集合写真を本誌に掲載させていただくこととなりました(H.P.には従来より掲載)。当学会の歩みの記録として意義あることと思われまますので、何卒ご了承ください。(高田)

平成二十七年三月十日印刷  
平成二十七年三月十五日発行

編集者 真宗学会  
編集委員

転載) 真宗学会長  
川添泰信

印刷所 (株) 図書同朋舎

〒202-8526  
京都市下京区七条六宮

発行所 龍谷大学真宗学会  
電話 (代) 075-333-3311  
振替 006016746番

取次店 永田文昌堂  
京都市下京区花屋町通西洞院西入  
振替 00303041936番

## CONTENTS

- The Aim and Features of the Interfaith Chaplaincy Program:  
The Design of Chaplaincy Program, Graduate School of  
Practical Shin Buddhist Studies in Cooperation with Tohoku  
University .....Naoki Nabeshima ( 1 )
- A study of the Passage on the First Evil of the Five Evils  
Paragraphs .....Daigo Sasaki ( 27 )
- A Research on Shinran's Expression:Japanese Reading Word and  
Japanese Reading of a Chinese Character  
.....Junshi Noumi ( 59 )
- True disciple of Buddha as a propagator  
—Review of the Quotations from true disciple of Buddha—  
.....Yoshihiro Okuda ( 78 )
- The Various Aspects of the Pronunciation of Chinese Characters  
in Shinran Shonin .....Isamu Sasaki (106)
- Dr. Alfred Bloom's Contribution to Jōdo Shinshū  
—From the Perspective of Social Consciousness—  
.....WONDRA, Mutsumi Fujiwara ( 1 )



# SHINSHUGAKU

JOURNAL  
OF  
SHIN BUDDHIST STUDIES

Nos. 132

March 2015

---

---

---

---

SHINSHU GAKKAI

Research Association of Shin Buddhist Studies

**Ryukoku University**

Shichijo Omiya, Shimogyo-ku

**Kyoto, Japan**